

# 目次

<b>第1章 問題の検討とシンポジウムのあゆみ</b>	<b>p 3</b>
1. はじめに—本書の内容紹介とガイダンスをかねて	
2. なぜ言語運用を取り上げるのか	高井 小織
—シンポジウムに取り組んだ原点と「私」の問題意識—	
3. 自主シンポジウムのあゆみ	村松 弘子
<b>第2章 シンポジウム報告</b>	
<b>I 言語力と言語運用の実際</b>	<b>p19</b>
1. 読書力診断検査に見る言語力	宮下 恵子
2. 聴覚障害児の言語運用力を育てるには	小川 征利
—小学(部)校段階の子ども相互・子どもと教師のやり取りに注目して—	
3. 難聴中学生の言語運用への支援	白井 一夫
—自由会話を通して進める談話処理のスキルアップ—	
4. 高等部生徒との日常のやり取りから考える言語指導	藤本 裕人
<b>II 思春期の心に寄り添って</b>	<b>p31</b>
5. 地域支援の取組から言語運用を考える	芦田 雅哉
6. 難聴学級在籍児童の自己認識に関する取組から	中山 育美
7. 中学校難聴学級の自己理解への支援	野住 明美
8. きこえない・きこえにくい中高生の言動からの考察	椿野 絵里
—交流と教育相談の取組より—	
<b>III 集団の力と社会参加・自己実現</b>	<b>p41</b>
9. 聾学校小学部におけるグループダイナミクスに注目した指導	佐藤 文昭
10. 聴覚障害のある中学生や義務教育後の若者たちの言語運用力	高井 小織
11. 高等部での進路指導を通じて感じた言語運用力	柳田 智子
12. 青年期にある人工内耳装用者へのインタビューから	石田 彩
13. ろう学生へのインタビューを通して	宮町 悦信
<b>第3章 理論的検討</b>	<b>p59</b>
1. 言語運用に関わる諸問題とそのモデルの検討	白井 一夫
—Chomsky と第二言語学習理論をふまえて—	
2. 聴覚障害児の言語運用力の評価	阿部 敬信
—「聴覚障害のある生徒の言語運用力の評価に係る質問紙」調査の結果から—	
3. 言語運用とこれからの実践的課題 —Good Practice の継承—	小川 征利
4. 言語運用と自立活動	藤本 裕人

# はじめにー 本書の内容紹介とガイダンスをかねて

## 1. 本書の内容と構成

本書は以下の 10 回の日本特殊教育学会・自主シンポジウムの記録を整理し考察を加えたものである。全てを掲載はできなかったが、大要はお伝えできると信ずる。特にことわりのない場合、本書中のシンポあるいはシンポジウムという用語は下記のいずれか又は双方を指す。

「聴覚障害教育における日本語獲得(習得)支援の実際を踏まえて」(2009~2014;2011 を除く)  
「聴覚障害教育における言語運用力育成」(2015~2019)

第 1 章は、シンポジウムの出発にあたっての問題意識と 10 年にわたる歩みを紹介している。

第 2 章は、シンポジウムの各報告をもとに、話題提供者が原稿を作成した。

第 3 章は、指定討論の任にあたった 4 名が、報告に考察や補足を加え論考を展開している。

## 2. 「言語運用」とは何かをめぐって

作成にあたり「言語能力と言語運用を峻別する」との Chomsky の理論を出発点とした。学説や研究の発展を踏まえての「言語運用」「言語運用力」「言語運用能力」といった関連する用語についても、検討を進め第 3 章でも言及をしている。その章末には一括して文献も示し参照に供している。しかしながら、限られた時間の中でこれらの用語を確認し整理することは私達の手に余る課題であった。この点については、識者の言と研究の進展を俟つものである。

私達の原点は副題にあるような Good Practice の集成であり、「言語運用」を理論的に深めることを第一の目的としてきたわけではない。議論を重ねる中で、実践を構想したり分析を進めたりするためには、従来の「言葉の力を育てる取組」を踏まえながら「言語運用」の問題に踏み込むことが必要で有益ではないかと考え始めた。この視点を整理したのが、次の 3. に示す言語モデルである。

## 3. 言語モデルの名称とその内容

以下の言語モデルは本書で繰り返し使われ、かつ重要な概念を整理するものである。読者の便宜を考えてあらかじめお示しする。その意義や内実は第 1 章と第 3 章で詳しく触れる。

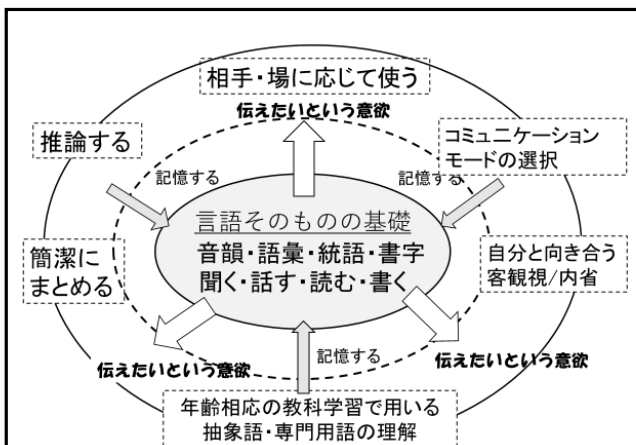


図 1 言語運用にかかわる高井モデル

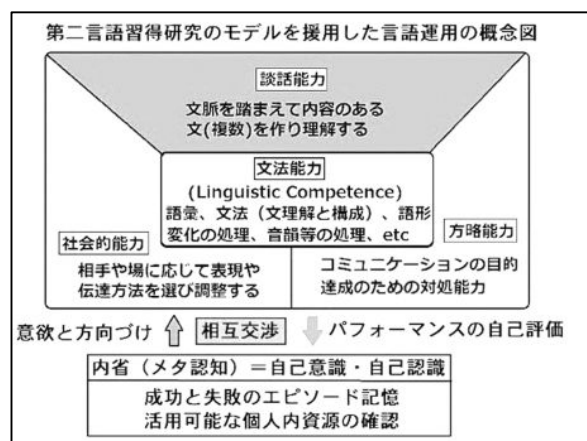


図 2 第二言語習得研究を援用した言語運用モデル

<抜粋>…本書の内容の一部を下に紹介します。

1 報告内容の概要

京都府立聾学校舞鶴分校（以下、舞鶴分校）では、平成14年度に開設した通級指導教室の指導・支援を通して、小・中学校で学ぶ児童生徒の学習や生活、人間関係における実態や課題が明らかになった。そのことから、これまで聴覚管理や聴覚補償が中心であった補聴相談に加えて、在籍校での学習や生活に視点を置き、個々のニーズに応じた支援相談（学習支援、心理的ケア、障害理解授業、集団の取組等）に積極的に取り組むようになった。

支援相談では、「勉強がわかるようになりたい」「先生や友達、家族に自分のことを理解してほしい」といった児童生徒の切実なニーズに直面するとともに、「自分探し」の悩みや迷いにも触れることとなった。その中の一人である小学校の途中から通級指導を開始したAさんの事例を通して、学童期から思春期における言語運用の課題や支援の在り方について報告した。

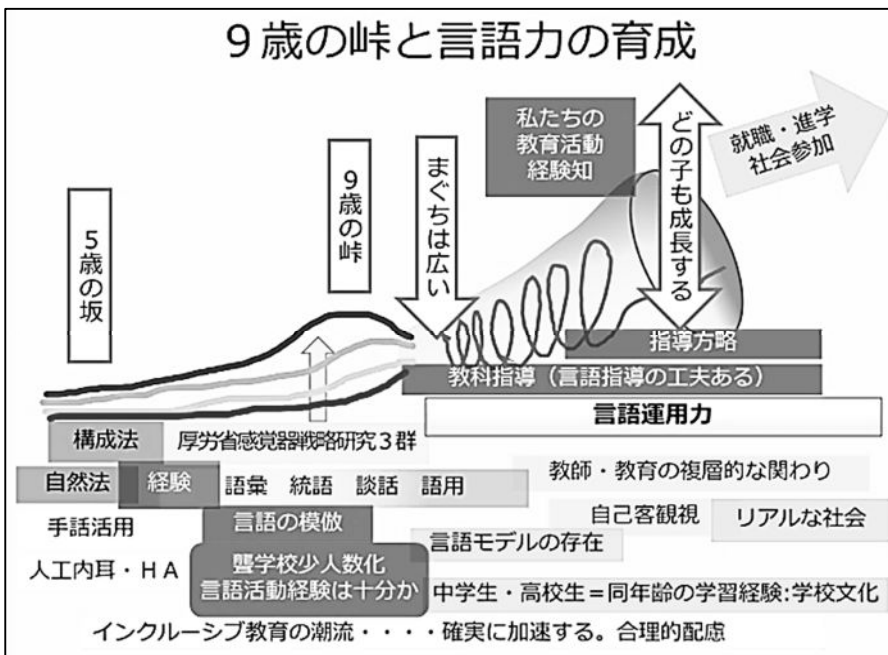
シンポジウム報告5 「地域支援の取組から言語運用支援を考える」

1 実践の知 –シンポ報告から見てきたもの–

「優れた実践を残している教師の経験知を知りたい」すなわち「Good Practice に学ぶ」という思いがこのシンポを貫いている。どの報告も、それぞれの立場から聴覚障害児教育に携わり得てきた“実践の知”が込められている。個々の報告を聴く時、単なる“個”ではなく普遍性をもつ何かを感じてきた。この報告から見てきたものは何だろうか。私は以下の様なポイントに注目した。

例えば、「言語力と言語運用の実際」の報告の中で、宮下は読書力診断検査による評価を通して言語運用について考察している。読書力診断検査は書き言葉の理解に関わる力を測るのであるが、小学2年生時の結果に表れる“あんこ”（「言語運用にかかわる高井モデル」の中心部分にあたる）の脆弱性が言語運用の稚拙さと関連するのではないかと考察している。白井は個の中で起きている言語処理について、記号処理としてのボトムアップと意味処理としてのトップダウンによってことばの理解がされ言語運用されるとする「ことば理解の図式」（長南 2010, 白井 2014 改）を示した上で自らの実践を整理している。藤本は高等部段階における言語指導に関して、言語環境の観点から教師が用いる言語水準について具体例を示しながら提案している。高等部段階においても言語力の状況を捉え適切なモデルを示し、言語力や言語運用力を育む事の重要性を指摘している。

理論的検討3 「言語運用とこれからの実践的課題—Good Practice の継承—」



裏表紙の図が語るもの

私達がシンポジウムを積み重ねる中で、この図は2012年のシンポジウムの中で提案されたものである。横軸に年齢進行(子ども年次的成長)をスケールし、変化していく子どものニーズを様々なカテゴリーの項目との関連で俯瞰するものである。本書の報告や論考と合わせて、ぜひとも味わっていただきたい。

## 9歳の峠以降の自立活動・言語指導の在り方を問う

### 聴覚障害児童・生徒の言語運用力へのアプローチ

－ Good Practice の集成をめざして－

高井小織・村松弘子・藤本裕人・白井一夫 編(A4版 96ページ)

LaPHICY 聴覚障害教育における「言語運用」を考える会

本書は以下の日本特殊教育学会・自主シンポジウムの記録を整理し考察を加えたものです。  
「聴覚障害教育における日本語獲得(習得)支援の実際を踏まえて」(2009～2014; 2011を除く)  
「聴覚障害教育における言語運用力育成」(2015～2019)

私達の原点は副題にあるような Good Practice の集成であり、「言語運用」を理論的に深めることを第一の目的としてきたわけではありません。議論を重ねる中で、実践を構想したり分析を進めたりするためには、従来の「言葉の力を育てる取り組み」を踏まえながら「言語運用」の問題に踏み込むことが必要で有益ではないかと考え始めました。… (「はじめに」から)

#### 第1章 問題の検討とシンポジウムのあゆみ

問題意識を確認し10年間の歩みを紹介しています。

#### 第2章 シンポジウム報告

話題提供者が報告をもとに原稿を作成しました。

#### 第3章 理論的検討

指定討論者が報告に考察を加えた論考です。

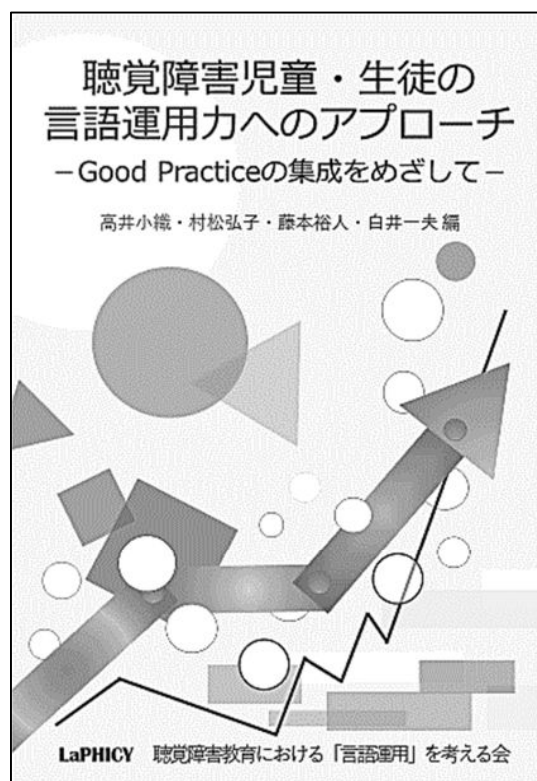
(目次の詳細は次ページ)

### 表紙に込めたメッセージ

表紙は私達の構想を象徴するものとして作られた意義あるオリジナルです。以下に作成者の言を抜粋して紹介します。

「裏表紙で使われている図から得たインスピレーションで作らせていただきました。具体的にイメージに起こすため、それぞれの想いや起源を伺っていたのですが、形の1つ1つに意味があり、どれをとっても深い…!と感銘を受けました。特に、図の『らせん』『プラトール(停滞)』の表現には、先生方の想いがぎっしりつまっています。

この『らせん』の表現はPowerPointだからこそ生まれたものでしたが、今振り返ってみると子どもたちのぐるぐる回る思考(試行錯誤の動き、シンポジウムに関わった方々の想い、弾ける希望など、色々な見方ができるような気がしています。上から降っているような図形は子どもたちに注ぐアプローチの要素を、右下の透けレンガは言語力を支える土台、元とした図から感じる世界観をなんとか表せているのでしょうか。」



頒布価格 1000 円 (送料別; 1冊¥200, 2-4冊¥300, 5冊以上は無料)

申し込みは [難聴の思春期を考えるページ](#) からメールで

URL <http://nanchohb.web.fc2.com/> メール [nanchobook@hotmail.co.jp](mailto:nanchobook@hotmail.co.jp)

難聴理解 HB 事務局 新潟市中央区早川町 2-3215